

2 支え合うなかで得られるよろこびと誇りを守りたい

丹野 広子 (社会福祉法人宮城厚生福祉会理事長)



保育現場で四二年……◆

私は保育の現場で四二年間働き、現在は法人に残り、微力ですが若い職員の方たちの力になりたいと思っています。宮城県内で、介護事業、保育事業、児童館、障がい者就労支援事業をおこなっている当法人は、社会福祉法人としては二四年ですが、その前史は私が保育士になった乳銀杏保育園の歴史にあります。

私は高校卒業後、仙台の親戚の会社で働きはじめましたが、保育士(当時は保母)になろうと思ひ高校の恩師に相談し、乳銀杏保育園の創始者である阿部和子さんを紹介してもらいました。仙台保育問題研究会の

「保育所づくり部会」に誘われ、なにもわからないまま参加すると、そこでは一九七〇年代に誕生した革新自治体の東京都のシビルミニマム(自治体が住民のために整備すべき最低限の生活環境基準)の学習をしていました。

自治体として住民の福祉の向上をめざすこと、保育所が働く権利と子どもの発達保障の役割を果たすこと、保育所において公私間格差をなくすこと、社会が大きく変化していくことなどを学び、社会福祉行政を知る初めての経験でした。保育という仕事のすばらしさを感じ、私は県立保母専門学院に入り、卒業後、乳銀杏保育園に入職しました。

子どもたち、保護者と共有した幸福な気持ち……◆

園長の阿部和子さんは戦前、戦争に反対し、弾圧を受けていた方でした。戦争の傷跡がまだ大きく残る一九五〇年、失業対策事業でおこなわれた宮城野原営舎総合グラウンドの建設事業で働くお母さんは、子どもを背負い、手を引いて、きびしい肉体労働に携わっていたそうです。その方たちのいちばんの願ひは、子どもを預けるところがほしい、というものでした。

休憩所の掘つ立て小屋を使い、共同保育所がはじまりました。認可保育所になってからも父母の会とともに運動を起こし、仙台市に学童保育所をつくらせることや、乳児保育、障害児保育、延長保育など、保護者の願ひを保育運動としてとりくみ、保育実践を切り開いてきた歴史を学びました。

保育内容においても、子どもを主体にする保育、子どもが自ら向かうように援助する保育、子どもの内面を深く理解する保育を追求していました。そのなかで、私は保育のむずかしさやおもしろさに出会い、子どもたちや保護者との深い共感をとおり、幸福な気持ちをとくさん抱かせてもらいました。

職員の処遇改善と安心できる経営を……◆

二歳児クラスのNちゃんは、ママの出張でさびしくて遊びに向かえず、給食も私に全部食べさせてもらう切ない気持ちのとき、ゼロ歳から一緒のTくんが心配そうに寄りそっていました。三日ほどすると、二人で笑いながら滑り台をくり返し、Nちゃんは「Nちゃんきょうひとりでたべる!」と宣言したのです。

三歳児クラスで、いやだと地団太を踏み大泣きしたりちゃんは、四歳児クラスになり、イライラしておこつてしまうSくんを「本当はやさしいのにね」と教えてくれて、Sくんやクラスを和ませてくれました。

子どもたちは、小さくても仲間と支え・支えられる関係のなかで、誇らしい自分を獲得していくことを学びました。私たちの福祉事業も、支え合うなかで働くよろこびや誇りをもつ仕事だと思ひます。今、コロナ禍で貧困と格差が広がるなか、私たちがおこなっている仕事は、困難をかかえている方たちを支えていけるように、福祉を担っている職員の処遇を改善し、安心して経営ができるように、この国がこのことをしっかりと政治の中心に据えてほしいと願つて止みません。